

「しかり、聞いてゐる」(マタイ二一章二二―二七節)

1 賛美の歌

招きの詞(ことば)によつて今日も私どもは「喜び歌つて御前に進み出る」よう命じられています。「感謝の歌」「賛美の歌をうたつて」御前に出ることを求められ、またそれが許されています。

教会というのは、何よりも礼拝をささげる人の群れのことですが、礼拝でしていることは神を賛美することです。

教会は神を賛美して歌う。歌わない教会があるとすれば、たとえ他に何がそこにあつても教会であるかどうか疑わしいことになります。賛美し、歌う。感謝をもつて神をほめたたえる。それが教会が世に存在することの意味であり、それゆえもつとも大切な神への奉仕です。

今日の主の日、復活後第四主日は、教会の暦では、カンターテ、うたえと名付けられている日曜日です。

カンターテ、うたえ！ 神を賛美することは旧約聖書において、神の民イスラエルにおいて、すでに大きな位置を占めていました。詩編各編を見れば、すぐに明らかです。じつさい詩編には何と多く賛美という言葉が出てくるでしょうか。むろんそこにあるのは賛美だけではない。詩編には嘆きがあり、罪の告白と悔い改めがあり、裁いて下さいという願いがあり、のろいがあり、神の掟や知恵を感嘆する言葉があり、喜びの言葉があります。人間の感情の、いわばすべてがあります。しかしそれらすべてを神の前に申し述べながら詩編は最後に、ハレルヤ、神を賛美せよという言葉で、そうした呼びかけの言葉で終わるのです(詩一五〇)。

こうした旧約聖書の礼拝を、イスラエルの(会堂^{シナゴグ}) 礼拝を、キリスト教会も、イエス・キリストから初代教会へと発展していく中で、受けついでたのです。聖書を読んで説き明かす(説教)だけではない、まさに神を、御子イエスとともに賛美する礼拝を整え、そうした礼拝をささげる群れとして教会を形成してきたのです。使徒言行録二章を思い起こしたいと思います。

毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごと集まってパンを裂き、喜びと真心をもつて一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え二つにされたのである(使徒二・四六―四七)。

この時代キリスト者の群れはまだ少数で、エルサレムで同胞ユダヤ人から必ずしも受け入れられていたわけではありません。そうした中で、しかしキリスト者の群れはその存在とそのしていることによつて「民衆全体から好意を寄せられた」。彼らのしていることの中に「神を賛美していた」ということが入っていることに改めて注意しておきたいと思えます。

2 神殿とイエス

さて今日の聖書箇所、マタイによる福音書二一章は、イエス・キリストの受難の出来事の始まりを伝えているところです。このおよそ一週間後にイエスは十字架につけられます。今日は、この箇所の後半、とくに一五、一六節を中心に話しをすることになります。

この箇所の前後関係をはじめに確認しておきます。イエスは、聖書にあるようにろばの子、子ろばに乗って（五節）エルサレムに入られます。弟子たちは子ろばの背に服をかけます。群衆は自分たちの服を、いわば絨毯のように道に敷いたり、木の枝を敷いて道をつくったりして、熱狂的にイエスの入城を歓迎します。また人々は、「ダビデの子にホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように」といって迎えます。「ホサナ」とは、当時の言葉で、「いま救ってください」という意味の歓呼の叫び、呼び声です。

ここで興味深く、かつ意味のあることは、イエスがエルサレムに来て、ただちに向かったのが、エルサレムの神殿であったことです。群衆は自分たちの服を道に敷いたり、木の枝で道をつくった。これを見ると、イエスは王としてエルサレムに入城したようにも見えます。しかし彼は王宮には向かいませんでした。またイエスが群衆によって「ガリラヤのナザレから出た預言者」（一一節）として迎えられたという言葉も見えます。しかしそう呼ばれたイエスは、神殿に向かわれたのです。そこがイエスの目的地であったと考えれば、イエスは神殿の主として、そこで人々から賛美され、あがめられる方として、「主の名によって」こられたのです。イエスが神殿を目的地としてそこに着いたということ、このこと以上にイエスがだれであるかを雄弁に語るものはないのです。

さて神殿とは、当時の一般の考えによれば、神様のおられるところ、神の住まっているところ、したがってそこで神にお会いできるところでありました。とすればそこに本当に神はおられたのかと私どもは問うてよいと思います。そして今日の箇所の前半、一二節以下が私どもに示すのは、もはや神はそこにおられなかった、壮麗な空虚さともいふべきものしかなかったということです。

そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである』。ところが、あなたたちは、それを強盗の巢にしている」（一二節）。

イエスはきびしく断罪します。神がそこで主として賛美され、あがめられていない、祈りがささげられていない。イエスは神殿を去ります。イエスとともに神ご自身も去ったのです。

そうであるなら、まことの神は、賛美されあがめられるべき方は、どこにおられるのでしょうか。

境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄ってきたので、イエスはこれらの人々をいやされた（一四節）。

「境内」は口語訳では「宮の庭」と訳されています。神殿の一番外の枠をなす庭です。当時の決まりでは、目の見えない人や足の不自由な人たちは、この外庭までしか行くことができず、神殿の中まで立ち入ることは認められていませんでした。外庭にいたのもおそろくもの乞いのためでした。

そこにイエスが来ます。すると彼らもそばに寄っていきます。物乞いするため近づいたのです。予想外のことが起こります。イエスは彼らを癒やされたのです。イエスもついていたもの、それは金銭ではない。生きる神の力です（使徒三・六）。彼らにとつて癒やしは、まさに思いもよらない施しものでした。彼らは神に近くあつていい人たちでした。しかし遠ざけられたまま過ごすことを余儀なくされていた。そこにイエスが来て、神との関係ができたのです。神とともに生きる道が開かれたのです。いわば神なきところから救い出されたのです。ここに神がいます。賛美されるべき方は神殿にはいない。賛美されるべき方はこのメシアであるイエスです。

3 聞こえる

だれが賛美されるべきか、だれが救い主か、その方はどこにいますか、それが別な形で今一度明らかにされます。

祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなさった不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか」（一五節）。

この「不思議な業」とは、さきほどの境内でのイエスのいやしの奇跡です。それで祭司長、律法学者たちは不愉快になっただけではない。子供たちがイエスをホサナと叫んでいるのを耳にし、腹を立てたというのです。

「ダビデの子にホサナ」と叫んでいる子供たちを見て立腹した祭司長、律法学者たち、しかしさすがに小さな子供たちをとがめることは、多少とも気がひけたのでしょうか、彼らは、そのイライラを、イエスにぶつけます。言わせているお前が悪いというのでしよう。

「子供たち」とは幼稚園か、せいぜい小学生ぐらいだったと思います。「ダビデの子にホサナ」と叫んでいました。しかしお分かりでしょうけれど、これは、ついさっきまで、イエスが都エルサレムに入られるにさいして、大人たちが、聖書の言葉でいえば「群衆」が叫んで口にしていた言葉です（九節）。子供たちはそれを耳で聞きそれを繰り返していた、子供たちなりにまねをしていたにすぎないと思います。いやちやんと分かっていて言っていたと、言う人もあるかもしれませんが、少なくとも、そういう子供もいたであろうことまで否定はしませんが、そこまで考えなくてもよいと思います。

しかし、子供のことだからと、判断力も・理解力も・自主性もまだないと、私どももこれを軽んじてならないのです。なるほど子供っぽいまねであり、子供らしい叫びです。しかしそれでも、メシア・イエスの来られたことへの喜びの応答と賛美がなさ

れたということは本当です。彼ら子どもたちが、自分たちのしていることをよく自覚しないまま、しかしそれが救い主の到来を証しし、賛美し、ほめたたえることがありうるのです。なぜ、そういつていいのでしょうか、またいわなければならないのでしょうか。イエスの答に注目したいと思います。

イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか」(一六節)。

今日の説教題は、ここから取っています。「しかり、聞いている」。じつはここで「聞こえる」と訳されているもの言葉は一語で「しかり!」「そうだ!」です。聖書に伝えられているイエスの言葉の中でもおそらくもつとも力と確信に満ちた言葉の一つです。

イエスが、それを聞いておられるということです。喜んで耳を傾けてくださっているというのです。しかり! そういつて受け入れてくださっている。子供たちの賛美と叫びは、申しましたように、まことにつたない、その本当の気持ち、むろん疑うこともできる、群衆の口のまねにすぎなかったのかも知れません。けれども、それをイエスが聞いてくださっているということです。

どんなにつたない賛美でも、それに喜んで耳を傾け、それに「しかり」を語ってくださり、受け入れてくださる方がそこにおられるかぎり、そのかぎり、じつさいそのかぎり、それは本当に神を賛美するものとして聞かれるのです。そうした子供たちの声も、どうして神をほめたたえてならないのでしょうか。

もう一つ、ここで私どもが注意しておきたいのは、イエスが、神が、聞き手となつてくださるというだけではない、むしろそのような賛美をもともと授けてくださったのも神ご自身だということです。

『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのかとイエスは問うています。祭司長、律法学者なら、当然のことながら、知っているだろうというのです。

それは詩編の言葉(八・二)です。「幼子」と訳されているのはまだしゃべれない子供という意味です。乳飲み子は、それより小さい赤ん坊のことです。にもかかわらず、その「口に」というのは、よほどの強調です。そのような者にも賛美を備えられたということです。

だれが備えてくださったのでしょうか、神です。それなら、そのように神を賛美する声は、じつは、どこでも、だれからも上げられているのです。声なき声かもしれませんが。賛美の声は私どもだけが上げているのではない。むしろ私どもの賛美も、地に満ちる賛美の声に和するものと考えなければならぬと思います。「全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ」、そう呼びかける光栄な務めも私どもはあずかっています。神が「しかり」といつて喜んで耳を傾けてくださる。私どもの賛美の歌の希望はそこにあります。

(二〇一九年五月一九日)